

生花早滿奈飛

全



叙

南里亭主人釋史著述而以業曾
嗜狂歌俳偕明友交厚或日一小冊
携予請序閱生花指南之圖式
及口傳數条舉子生華逸初而
知生之業姿造雖予練業易得

實學難覺師家所謂印可不漏
之秘莫委紙上題以而導初心
生花志者從據此書可學不待
師知真旨之捷經生華早學題
而其斷述者浪花逸士

一本亭魚鱗



生花早滿奈比目録

- 一生花全鉢の圖解 并 五備の姿ある変
- 一生花は用る言の更 并 生花の七難圖解
- 一花器花留の名目圖解
- 四季草木の傳 并 新圖三十瓶
- 一生花起原流々異説の解
- 一極秘傳生方心得十箇條

生花全體之圖解

鉢添合はつぞへ五備ごびの全ぜん鉢はつを
具ぐ足そく一いつたるたるあり



鉢はつノ枝え 又また陽やうト云いふ

添そへノ枝え 又また申まうト云いふ五ごノ枝えを
根ねト云いふト云いふ

⑤ 枝別えだわけト云いふ 又また申まうト云いふ



是これより思おもひひくは
添そへをを変へん化くわしし生せいるるをを実じつ体たいト云いふ
五備ごび全ぜん体たい実じつ体たいのの変へんををくくま
ああくく言いふふ

檀特葉蘭たんとくえらん生せいるる

全ぜん体たい

大おほ葉えのの

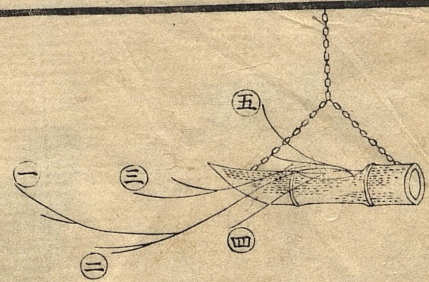


蔓草まんそう志しるるひひ出で

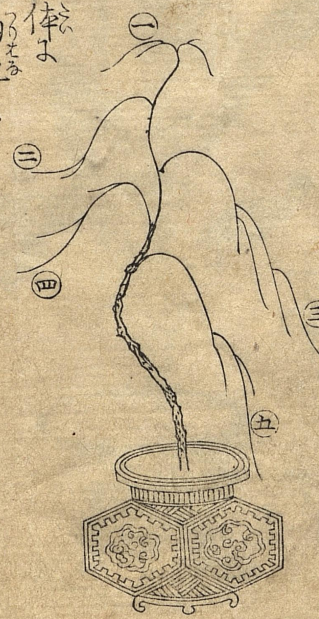
全ぜん体たい



鈴^{すず}けいちご萩^{はぎ}などの
まなひ物^{もの}はり花^{はな}の全^{ぜん}躰^{たい}



押^{おさ}のるいたるゝ物^{もの}の全^{ぜん}躰^{たい}



朝^{あさ}良^らなどの蔓^{つる}
ものい柴^{しば}う女^め竹^{たけ}を俵^{はたけ}よ
くりそ右^{みぎ}のふりて物^{もの}花^{はな}
と生^うる

真^まの行^{ぎやう}全^{ぜん}躰^{たい}

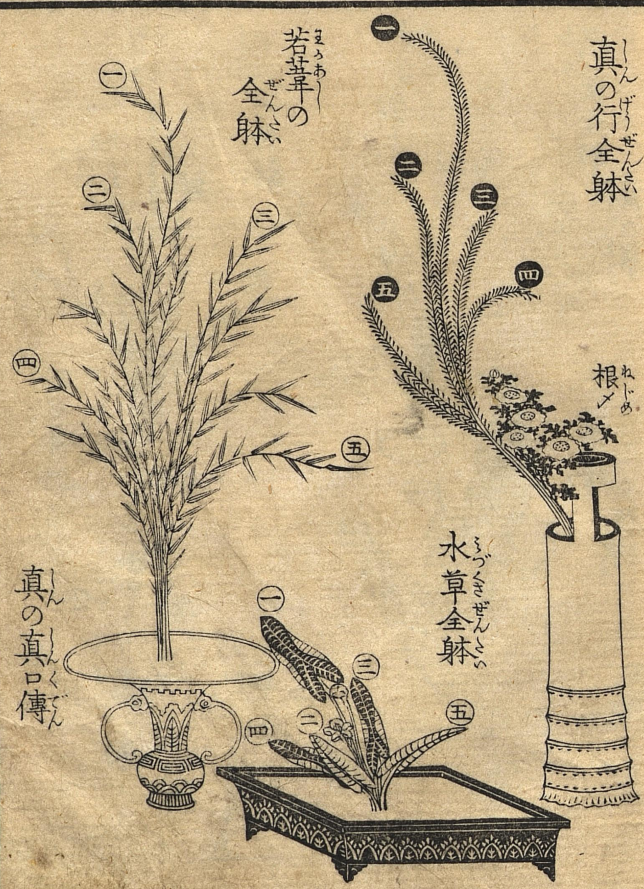
根^ね

水^{みづ}草^{くさ}全^{ぜん}躰^{たい}



若^わ草^{くさ}の
全^{ぜん}躰^{たい}

真^まの真^ま口^{くち}傳^{でん}

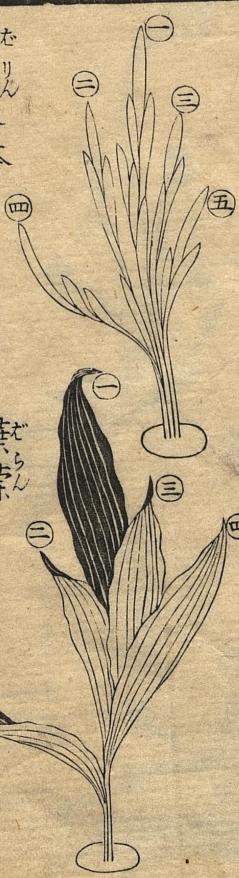


本草綱目

杜若全體真



木賊の全體



馬蘭全體

真の草

葉蒙全體行



紫菀全體行



紅蕉全體行

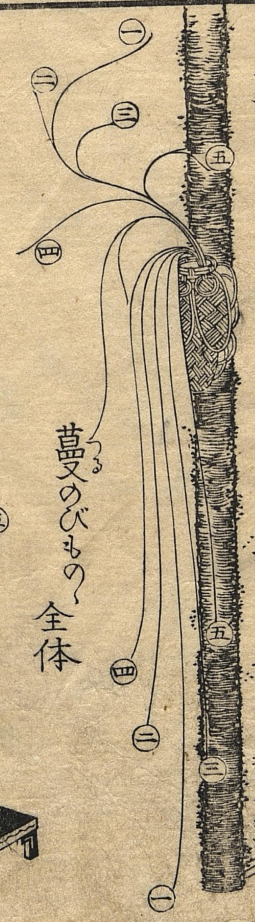


川骨真の行

水葵全體行



連翹藤のふ全体うけ花

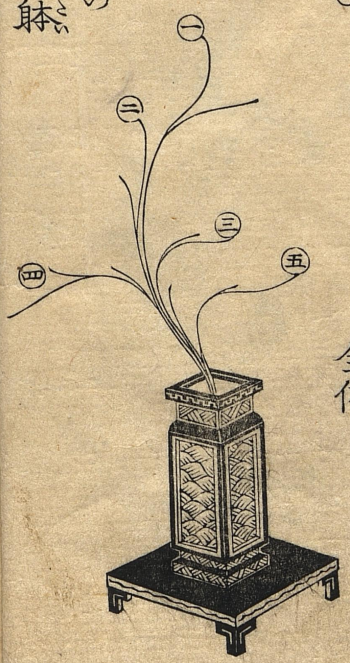


蔓のびもの全体

鷹爪山吹

置花よて
なびくもの

全体



二種二瓶全体

真の行

葦と菊

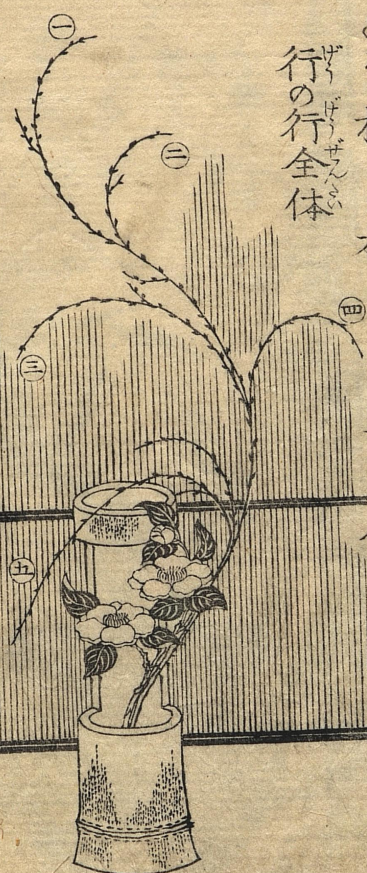
五ノ枝を余花より

全体をとつて



行げの行げ全ぜん体たい

器き車くるま僧そう



名はさぐよこぞく小菊の花はも
 けこの酒めをめくとらべー

梅うめ
草くさの真ま

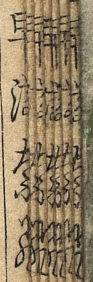
尺八切 しゃくちぎり



枯ね 黍きび 水みづ 仙せん
行ぎやう の 真ま

器と二重切ふちうきり





女良花全体



二重切 みぢうきり



椿つばきの連翹れんぎょうの全ぜん身み

釣舟つりふねは二種ふたしゆ一いつ瓶びんのな蜜みつ

早稲
新米
新米

大懸籠二種一瓶

一枝三三の

備

全

蘆花杜若の全行の真

芒大菊

全体

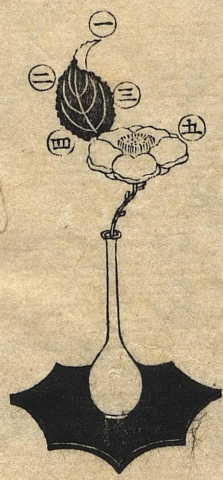
草の真

柳水仙
行の真



一、まん入の号、この花は、
好く用ひ故、その秘法をある
は、のて、これ、花、を、
と、る、一、牡丹、花、を、
大、り、ん、も、の、花、の、べ、ん、と、
五、枝、の、金、件、を、
含、ま、せ、花、の、を、
一、一、さ、の、い、べ、ん、を、
か、さ、し、り、う、五、枝、を、金、く、調、ふ、
是、の、秘、法、の、秘、法、を、
面、文、に、傳、へ、し、花、の、水、を、
花、の、水、を、
花、の、水、を、

一輪葉投入全躰



生花を用る言

一、麗、み、花、の、入、る、を、
一、流、花、の、根、り、
一、開、花、の、根、を、
一、根、入、花、の、根、を、
一、三、役、花、の、根、を、
一、冠、花、の、根、を、
一、露、花、の、根、を、

一、露、花、の、根、を、
一、冠、花、の、根、を、
一、三、役、花、の、根、を、
一、開、花、の、根、を、
一、麗、花、の、根、を、

一、露、花、の、根、を、
一、冠、花、の、根、を、
一、三、役、花、の、根、を、
一、開、花、の、根、を、
一、麗、花、の、根、を、
右、の、七、言、の、生、花、は、
病、の、り、次、は、
生、花、牛、に、
生、花、牛、に、

花器名目并花止圖式之度



床の石主客の
花止
縁手を入り



用形の花器は角を二面
見せし主客の位をさし
角へ花を出さるべし



花のまじり
あるを打く



又猪目



を



枝先客の
むかし
きん



赤
白
赤



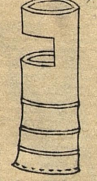
色を
色を
色を



かくのどく何れも花を
えとくさる余はこれより
えとくさる余はこれより

花器名目并花止圖式之度

一重切



二重切



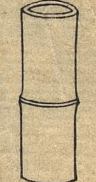
車僧



八切



百度切



千代



何ん切



洞



瓦



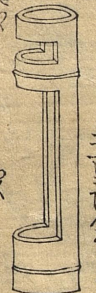
橋



獅子口



庸軒



置台のあたりにて置くが
置く代三まき好は
置く代三まき好は

里
海
物
類
考



里
海
物
類
考

土
物

早瀬

三



花器金鉄竹籠陶器樂焼家々のこのよはひに教多
あれども大ていそれらの名目をかきとりて変形其作の雅
品といふなり新古今をひて

の 子 抄 本 の 傳 記 圖

○ 栞花 紅白八重ひと小枝多く矯小き物之弗
かぎて後とむべし 白梅はかくし 床情は挿紅花ハ
多く枝振く挿なり古瓶を好む早春より常も宿
はゆり古来の心を合く挿べ

○ 柳 春のめやなぎ四季ともよめけり水辺を好む
心より下は池川など有ゆり又働くはべ
○ 椿 数品より白玉を上位とせ小枝短く花目
らみ咲自性之葉くぐりを先みて花を後とれる
多く獅子に又ハ根ぞは用也

組

三

梅 紅あま



器さび竹二重

水仙 紅あま

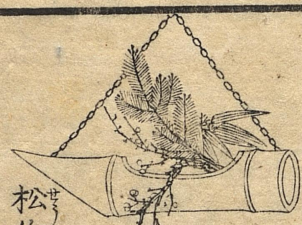


器南京 保つけ

柳山茶花



二重橋杭



松竹あ

釣舟

蒼牡丹



○ 褐壽草 卓下^{しやうげ}の廣に砂^{いり}をの根ぞ^ねへ^へより

○ 連翹 かけ花^{かけはな}より^{より}生^なも風情^{ふうせい}あり

柱^{はしら}などの大竹^{おほえ}より^{より}生^なも風情^{ふうせい}あり

○ 高麗菊 木花^{きはな}の根^ねより^{より}用^{もち}あるり^{あり}杏^{あん}の取合^{とりあ}はし

くうつりより^{より}一種^{いっしゆ}小^{せう}のかけ花^{かけはな}より^{より}

○ 笑靨花 何ん^{なん}う切^きなどの竹^えより^{より}あ^あくつる白^{しろ}及^{およ}百合^{りやうりつ}

など花^{はな}に^に生^なる面^{めん}白^{はく}より^{より}

○ 金雀 矯^{きやう}よく^{よく}自由^{じゆう}ある枝^えあり余^あり^りあると^と狗^{いぬ}

の尾^おのどく^{どく}何^{なん}く^く花^{はな}あると^と一種^{いっしゆ}入^{いれ}て^てはし

金雀^{きんせき}さん^{さん}花^{はな}

器 伽羅木



連翹

玉花









器き
唐たう
銅どう



彼岸橋ひがし橋はし

器そとひしひぎぎ竹たけ



かやうな思ひこゝろに七ア
正画より見たるやうによ揃べ
けまへをはく思ひも同じやうな
かやうな思ひこゝろに七ア

早瀬

○桃彼岸様 巧者なくく枝亦成る二種の合ホ

むつろく多く栄種あかなどより桃の枝天へ

突くまじく故にやきき根をさく花のひんを

付べー彼岸様花紙り肝要尤一種入は限る

○極松ハ制花のうちまで印可の上あて入がく去ども

初より挿流も何り極折はさく速を入は

生る之花落ちりたれ落板の上あて入も花をお

ーむ風情ふうー

○杜若葉沢山まき生ぶりよからる葉の自性を

○海棠一種入なり金銅の古瓶より手練もの

○紫葳花は花高る葉はのりらいて能うつる

○山吹墜木もく水辺をこのむ柳の高の本あて

辺は遠く花は低の本あて水あてつる掛簾の舟影は

○白芨葉つる馬葉万年青は数してやき

こま生る鈴りけとえ合せくよー

○菜種ハ梅りの根も用ひ一種入はせ

○大半鞠花のうさちあぶく猪の目も成やまし

うけ花入ぬ花あり玉簪よー

○躑躅好て入る身徳を唐金の古器へる能もの

爲朝百合花
ためちりの花



芍薬花
しやくやくの花



かきつばた
二瓶



冠きつばた
くわんきつばた

早稲花

花

○辛夷木蓮までござー同様の生方一種入は定る花

なり枝歩んを付べー

○卵花小器のさび竹々洞器は入重ー随分花を白

く見えてるやうな器の取合せ肝心な十姉妹魚菜

み入る自性をあらわし弱枝は入へく強枝あり

○牡丹は傳花あり大く振やうな挿至る大輪あり

一輪入もよー苟葉も同様にねれども葉どりのまじ

はざやうな挿志うれどもえ葉を切るをいまいむ

○百合花花莖つよくて生よー姫百花花ちいさくて

○夏黄梅舟釣生ようつりよー二重切の鉢にも生る

○鷹爪小枝ををさむうち風情生る瓶にささぬ

ち枝ありー花器は取合はべー

○狭竹桃一重咲よー花多きいれさうー用ひけ花

○紫陽花花おもくて低きあー花ををうて用ひ

○びやう柳け花金糸梅ともいふ魚花は詠めたり

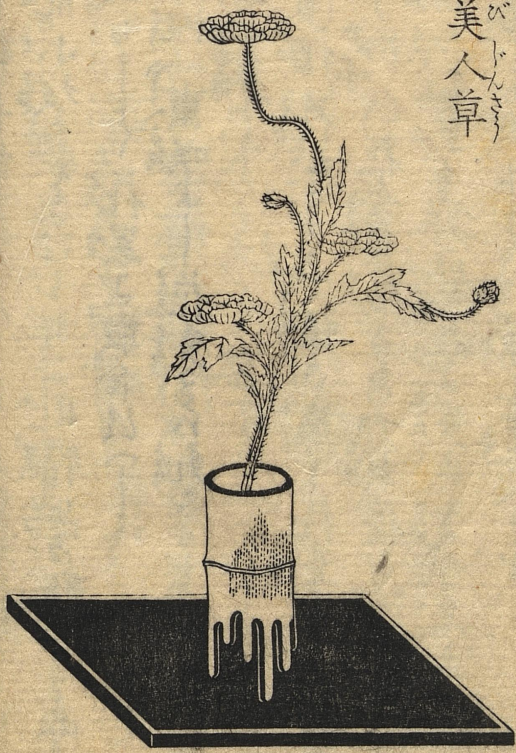
○鉄線花蔓もの鉤花は多き生中えと花を

細り葉も准とく利葉ををさべー

○美人草中笑を用ひ満花はれ散やきー

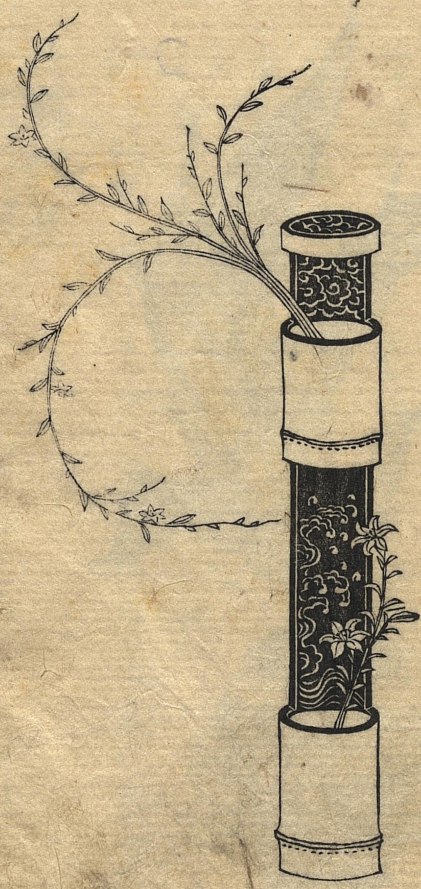
早苗
花
草
記

美人草 びじんそう



十一
九

复黄梅 ふつこうばい
姫百合 ひめゆり



早苗
花
草
記

七

檀特蕉



○罌粟花美人草よりひとくねり美なり

○萱草葉のともめをわづき高低をつけて左右が

葉を花のくまひつうりと付く挿べに傳はり

○檀特花葉より易にほろろとく留葉の曲り

低くつるふべ芭蕉なども同様の生方なり

○萍蓬草花は葉をふくきふ大槩蓮花よりひと

釣瓶水盤より水上うねる物あれば花葉の莖より

細き竹をさしそ穴へ茶の抹或は土炭の粉を入

る生べ

○桔梗古瓶よりさなごころのうらやま

早
花
菊
類

川
骨

上
下

一
瓶
の
湯



○仙翁花かんひの種類内黒の何んそつ筒へ入るよく

うつ馬葉木絨あとの何らいの用也

○射于午時まぐの花あり鉢へそ侵入る鉢底ハつり

合を見さため取る葉を鉢へ添生る鉢底も花

の莖を引さげ移しつるふ市店も賣南京とい宜し

○大明菊古器の懸花よ一茶室は求情あり

○木賊並ふ高ふか自性なり瓦形など入る小花を

何らい用也一種入も雅趣之上手の入るあり

○其菊近年ハ花の種類多く造り出さ秋菊と

同い心あくさ一葉づひのまう有べ

早
花
菊
類

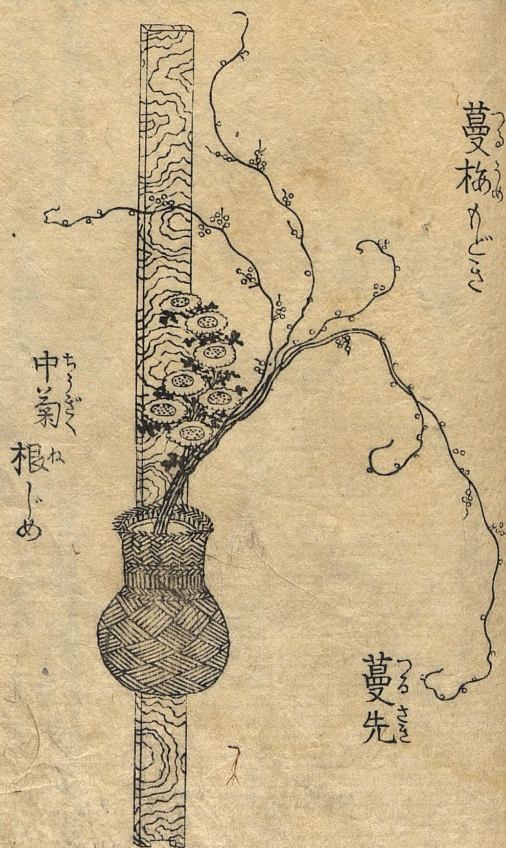
早
花
名
勝

白大菊
名勝



蔓
梅

蔓
先



中
氣
根
め

早
花
名
勝

花
名
勝

大菊赤
をほくくちう



月赤抱
いちづつあか

○紫菀葉つゝのひ至つゝむつゝ——葉の赤合せ二段二段

入るとも五段よるふと同ドやうな朱く足苦——美お

の馬を足合々々肝要な舎得まぐ

○瞿麦此花ハ沢山よ入るふよし三段五段よ分て入て

○春羅はちち手放れをやくせられ花きほそ安

○澤持梗うけ花入のものなり並花の時ハ仰よ何ーらい

物——根メまきべー

○紫莖をうへよ見せざあふよ——櫻にほり

○木槿禁花あれども時宜ふより生ると有

○紅蕉大もみだんどの生方なり

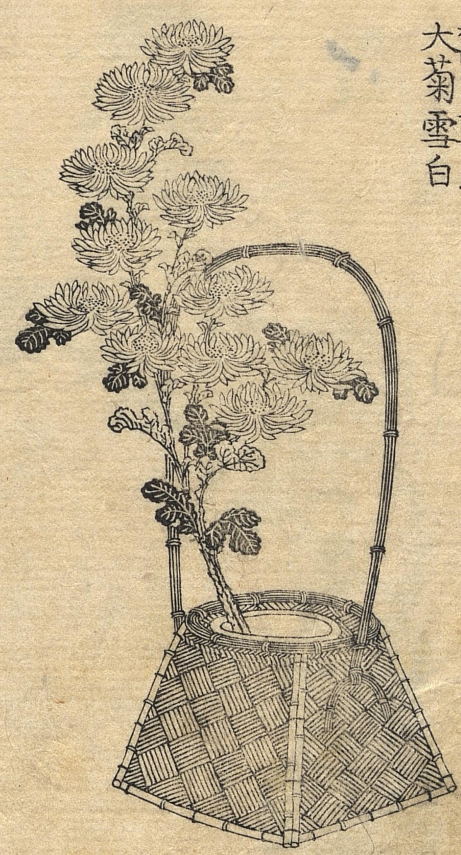
○菊夏より秋へけく百瓶の内六歩の采なり故に
 秋の菊を教瓶にぬ諸花の生方此菊の馬
 めく味ふべし尤大中小の教品その自性をよくま
 さまへく挿べきなり大菊を短ふ切小菊を脊高
 くきふ性は遠ふと知べし
 ○女郎花この花教かくまづなるが自性よくよ
 たよくと風は靡く心をさるよめり
 ○秋海棠花教まき用ひよく水をよきさへく挿べ
 まき類多々れども十寸穂の薄を口傳とせり



極紅
 大輪菊
 赤兎馬

早稲
大菊
雪白

大菊雪白
なほきく せきしろ



加
土

樺大菊
なほきく



早稲
大菊

加
土

○龜龍膽根は用也蔓るんぐり釣舟より

○雁来紅水を上るぬる物なれが志づの味あり

○八朔木これ枝ぐり拍子環きを肝要とす

○萩をさ花蔭端などよ一秋の物さきこまら

たをゆる花なり栗のふを専ら含むべ

○白木のけととも一種入なるべ

○紅糸楓白膠木黄極柞黄楊地錦絡石栲櫟

柿銀杏その余なる紅黄よりなる物を取つる

中にも根をもつる紅葉といふ大慈入べ一海山峯

○亥子柳又狗子柳これ柳の芽あり紅皮をぬぐる

うち白椿を根と芽を吹く毛つきたる赤

椿の根を用也も椿は限るを合せよく述べし

○万年青葉づひに傳はり実ハ葉のうとやるが自

性なり考入べ

○梅嫌葉をこぐとりて実をよりよして入る蔓と

二品あり蔓もどき生よして宜一都く生花ハ

花葉より限り実をより用ひばいとも色づきたる

ハ捨るよよなり

○残菊花の付際より莖よりおなれが花より

早稲
早稲
早稲
早稲

野菊^{のぎく}
よめかたぎの花^{なま}



若松^{わかしゅ}
若松^{きく}
根^ね



早稲
早稲
早稲
早稲

早稲

○冬至梅椿などの根より生る目や交立をぬぼ

○寒菊葉の色こげく雅藎あり専ら葉を賞して

入るー紅白の寒菊の花を賞まべー

○水仙葉のうらに傳はり根えのそくまと称ま白皮

を抜く葉を二まづき子孫ぢれる癖を速

又えのどく袴をきせそく決めを告るべー

○室竹新葉のやうけるを用也流ーうけて入るを

きらふ立目よ生るーうらいまふべー

○迎春花懸花釣瓶など入る相應まべー

附録應接物之分

○柗金雀馬蘭葉蘭木賊惹まふふあー

○柗柗

一とせま三交花けりされど賞まふなどの花よりあぐ水

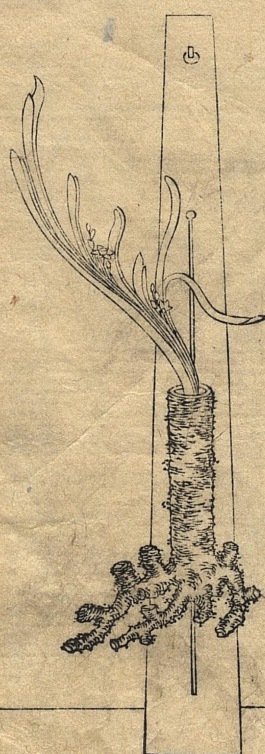
盤大畧の物より合まべー

○糸杉女控

並けともよ用柗をなと

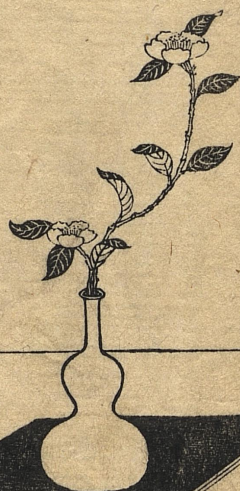
○圓柏

葉一げくこりたるを刃返とて根添の花よそと
らきを付く入べー意をきともよ入る



水仙

山茶花



枇杷の花

寒菊

水仙

○錦木

置花はよくうつる金盞四方はよふ合よ

○猿猴杉

ちがき一枝はをくさる有を見立く入下根添よち
椿むもよ一陸分つよき花を何うふ

○松

をさ花はゆる時根添を用ぬれども根添は信何り
松は傍近の羽目ひとく故なき花を何うふ

○蒲江浦芦

ける水添血の何ういふま

生花起原の解心得べき条

○生花の起原和漢ともは往古あり有とあれども

今のどく法式のあらうまのいふは然るを道を
るせんとく釈るの拈華微笑上官を子の三教一
楊貴妃まの哀容道を度と附會して生花は五德
五能のよきを寄説して人よ勝る族何り生花の法
式盛は規矩流々唱へ来りハ潮東山教下の物好あり
己来のよして茶方の愛花は弘もじ也故は千家遠
石州など茶家の流美を仮用也元来流祖遠く度
法式傳受せられよ何は花魁の姿は相應しく

其流を見立まづける物なり故に自己は姿をつくり
出し流を二流さる難うんやされども一流を唱むの
一流の規矩を定め何藝をも其本體を失ひぬ招よせ
ねば他を教ふる師といふべし本躰といふ人の五體即
天地の五行なり和歌は篇序題曲流といへる歌の本たは
して一首の五備なり今世都鄙を平の垣は俗し諸
藝下俗は流と業賤しきま蔓り上手なりて妙なし
業は賈へやまて心の悟りが物皆知好樂の三あり
生方を習ゆるも本躰のころを知らね生花を知ら
よして世俗の倫理をのこるは花を好むものよして柳ありむ
の避病を知る業はあまの花を好むものよして柳ありむ
者も及び本は五備の全躰を會ひて実体の働をま
し深き曲を造るとさ生花を樂に至り四季おくの
たのしみ究りなふべし

○二三四五の全躰をまゝしう時ハ歌の五備五行の本火土金
水之故は万物土より生ト土を母の位といふ易の坤土あれは
三の枝を躰中の躰と心得二四五は皆あまの三の枝より働をま
さふ一歌の題を居る五はの三位より中央の五文字入
生花の本たはを味ふべし

○凡生花を自在に挿んとあれは草木花葉の生山に生

園その草木の好む所を知るを第一とし然れども草本教多
みして花をいふ事多しとむじし本州は家よりて習ふ時
知れども本草の書は彼は似是も等一きと曲を摘ぐ
教る故は容易なり只花市より扱ふ所の草木をも
つて市店より尋ねてめく是れ市店より扱ふ
独樂とりふとも挿ぐらひ教年上達の後より自
然に得篤きなり

○初心の内は何より挿ぐらひ試み手練まぐりと
いふも後室は形なき人の名もまれば草木を
生ひて育める草木花を扱ふ生習はべし
野自然生の花枝は力なく自由なるは市店より扱ふ
花は茎ふとく花首つよ然れども技りて手練まぐ
一常は手練一々矯ちるはべし

○花といへば何れも美の言葉なり花嫁花香など
みくも一む故は抑は水仙金雀は椿その余三種
の取合せを挿ぐらひ花ある物を前よりめく生を
べし是れ人も根の花を愛しお物を改める
心得有る一教瓶ちる生る金席ちるめ
花物の咲いづる前後を大堅准よりめく
雑物あれば末席は並らぬはべし

○生花をえんぶせんとう小瓶すゑは枝多くさー
孔雀の尾のとき近來奉納の席など見及びぬ
當流まゝの好まぬ大槩花器の丈を一尺あれが
枝一尺すなうのよゝ躰を定むべし瓶器の一丈
半を定すところろ長短すづの差略有くよー
水盤砂鉢廣いもの舟形などいひの廣すを一丈
半まゝの猶席の廣枝をエ風さべし

○花器の名目をあると生花者流の才二義あり
是も流し好まよりの限なれど大いなる本
幹名目易まゝに記しぬ

○立花は真といふを生花は体といふ躰添を主として
五備をなひ當流は陽中根メと三の枝を天地人
の三役とき陽天りて花を用ひ躰なり中ハ
人の位より半突を挿根ハ地陰より蒼を
ささぬ則ち添の枝これなり多枝挿とも此
三の枝より變化を造と心づべし

○惣俵花木を挿植よーたる心を合て枝のこけ
ざゆやうは見さへ水盤池澤は水草の生
出さふ心もちよゝに廣は一丈半なき牡丹花を
三株をより並べ生よまべし花器まゝ味ふべし

河
山